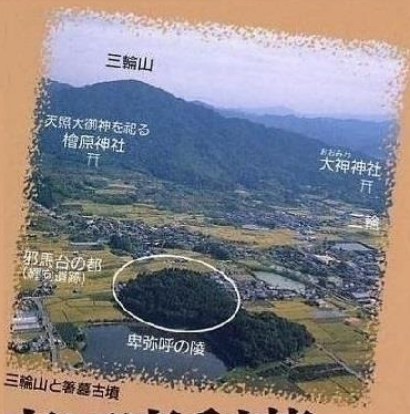
やまと

邪馬台 三国志

歴史物語のあらすじ 最新版



三輪山と箸墓古墳

神武は大和朝廷の開祖
天照大御神は卑弥呼

高田康利著

邪馬台国史が見えた **邪馬台国時代の歴史を物語に**

中国の三国志、日本の戦国時代・幕末をはるかに凌駕する世界に誇れる歴史です。

前五世紀から倭国大乱まで、那珂つ国と天之国、オロチ厳之国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国の王朝が立て続けに興った。

二世紀後半、伊弉諾の御世、畿内勢が謀反して大乱が勃発した。倭奴国王朝は瓦解し、日向に天照大御神（日神）を仰ぐ高天、大倭に天照大神（日神の婿養子）率いる邪馬台国に分裂した。

二二〇年代、日神は大倭に遷座して、倭の女王ヒミコに共立された。

三世紀後半、日向から東征した磐余彦（神武）が火明饒速日（火瓊瓊杵の児、海幸彦）の建てた日本朝を倒し、橿原に大和朝廷を開いた。

司馬遷の信念

日本の上古を切り開くのは、南方や大陸からやって来る渡来人たちだった。それぞれが固有の宗教・伝統・風習、歴史・神話・伝説を引きずりながら、日本の歴史を作り上げてきたのだ。

その中国では王朝が再三入れ替わることで、古い歴史を反映するはずの神話や伝説が断片的にしか残らず、しかもこっけい話が多いことから、歴史事実から外されてきた。

だが、その一部が我が国にしっかりと根づいており、「記紀」神話や伝承、地名、風俗・風習、さらに歴史そのものと深く結びついてきた。それを根拠の無いつくり話または単なる言い伝えと切り捨てる前に、日本の古代史とどう符合するのか吟味しなければなるまい。

司馬遷の言を借りると、「総じて、上古のことを伝える書経（五帝～周の王者の言辞）や古老の伝承から、あまり離れていないものが真実に近い。そのことに深く思いを巡らし、心にその意を知ること、それが大事なのであって、伝えられていることは決して虚言ではない」ということになる。

☆ヨーロッパでは、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』にある物語は、古代の伝説と決めつけられたが、十九世紀になってドイツの素人学者シュリーマンがトロヤの大城壁都市とともにおびただしい財宝を探しあてるに及んで、記述どおりに史実と判明した。

☆中国でも、司馬遷の書き残した『史記』「殷本記」は、神代と歴史時代を結びつけるための作り話に過ぎないとされたが、二十世紀に、王国維が甲骨文字を解読し、ついで殷の宮殿跡や陵墓が発見されたことで、「殷本記」にある事績や十数代にわたる王名が真実と判定された。

これに加えて、哲学者で古代史に造詣の深い和辻哲郎博士の説も頭に叩き込んでおく必要がある。

「皇室の発祥が大和であったなら、畿内勢の祭器だった銅鐸は大和朝廷や皇室の祭祀・文化の中に何らかの形で残っていて然るべきだが、銅鐸は山中に打ち捨てられた形で見つかる。

一方、北九州系の鏡・剣・玉は皇位の印しとなり、副葬品として古墳に埋納されてきた。このことは、北九州勢が畿内勢を打ち破ったことを物語っている」

倭の女王ヒミコの一生

六代女系天神、天之尾羽張神の宗女として誕生→向津姫→天之国の天照大御神、日神
→倭の女王ヒミコ、厳之御魂天疎向津姫→天照大御神

1 倭奴国（倭+豊葦原中つ国）王朝六代女系天神、天之尾羽張神の時代（一六〇年前後～一八〇年代前半）
一六五年頃、六代女系天神の宗女として糸島平野怡土の天宮（天上の都、平原？）で誕生→向津姫
※豊受（天照）皇太神（熊野櫛御気野、出雲では大穴持、大国主）→〔齢十代後半の向津姫に婿入り〕
婿入り前の皇太神は、伊雑宮の巫女玉柱屋姫（瀬織津姫）、尾張海部家のハハツ姫らを妃としていた
※一八〇年代中頃、三輪氏らと組んで謀反し、邪馬台国〔瑞穂の厳之国王朝→ヒミコの天（厳）之国王朝→火明饒速日の日本朝に発展〕を興して天照大神、水天神、天叢雲、倭大物主と語る。これが倭国大乱だ

2 王朝瓦解後、高千穂郷に逃れた高天（日高+天之国、倭と語れず）期（一八〇年代後半～二二〇年代前半）
天之国の天宮、高千穂宮では、天照大御神、日神（七代女系天神）〔齢二十代前半で、日神に即位〕
※豊葦原中つ国嫡流の稚産霊→日神分身（稚日女）→邪馬台国に移って丹生都比売→丹生都比売神社主祭神

3 天（厳）之国（倭国）王朝時代（二二〇年代前半～二四〇年代後半）。〔齢五十代後半で大倭纏向に遷座〕
上之宮で倭女王ヒミコ（日継の御子、日の巫女）に即位。亦の名は撞賢木厳之御魂天疎向津姫
※天照大神妃（天照大神荒魂）の瀬織津姫→ヒミコ分身（撞賢木厳之御魂天疎向津媛、天照大御神荒魂）

4 女王退位直後の笠縫邑（檜原神社の鎮座地）では、天照大御神

5 伊勢の五十鈴宮では、天照大御神
※笠縫邑と五十鈴宮では、天照大御神が天叢雲剣を依り代にして天照大神を祭祀

6 二四〇年代末、五十鈴宮で逝去〔享年八十余歳〕→箸墓円墳部（石積み五段重ね）円形壇に埋葬された

7 三〇四年二月二三日、鳥見山中の祭場（桜井茶臼山古墳）で、夫と共に皇祖皇宗に配された
※内宮祭神は天照坐皇大御神。荒祭宮祭神は、天照大御神荒魂（撞賢木厳之御魂天疎向津媛命、瀬織津姫？）
内宮別宮伊雑宮（天照大神の遥宮）祭神は、天照坐皇大御神御魂、相殿祭神は玉柱屋姫命（瀬織津姫？）
ちなみに、廣田神社（西宮市）祭神は天照大御神荒魂

『邪馬台三国志』歴史物語のあらすじ 最新版　目次

◇呉越の歴史／秦漢の統一王朝成立
◇王朝の変遷　◇大和朝廷の成り立ち　◇倭国／倭奴国の国のかたち
◇本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図〕　◇本書の王系譜
◇邪馬台国の国々／天孫火瓊瓊杵の日前（投馬国）西都（宮崎県西都市大字妻）と
天孫天火明の日高見国東都（千葉県市原市惣社）

倭国の生い立ち

倭奴（ヤマト）国王朝／倭国大乱〔倭奴国王朝＝天地（あめつち）、倭＋豊葦原中つ国、倭（ヤマト）＝高天（たかま）＝天（厳）＋日高〕
◇倭国大乱と瑞穂の邪馬台国勃興〔大乱勃発時の戦場→神戸市東部　決戦場→島根半島の闇見国（黄泉国）〕

東西の王朝〔大倭に瑞穂の厳之国王朝（邪馬台国（やまと））、日向に高天（天之国＋日高）が並立〕

倭の女王〔倭（やまと）＝邪馬台国、瑞穂の厳之国＋高天の天之国、天（厳）之国＝両王朝が合体し、女王を共立〕
〔倭の女王ヒミコ＝高天の高千穂宮に天宮した日神の天照大御神
〔倭女王の勢力圏＝倭（関西～北九州）＋火瓊瓊杵率いる日前（投馬国）＋天火明率いる日高見国

日本王朝と日前の対立〔日本（やまと）＝火瓊瓊杵の児・火明饒速日（火照、火明、海幸彦）率いる王朝〕
〔日前（ひのまえ）（→後に和（ヤマト）国と改名）＝天火明（二代垂仁）の児・火火出見（山幸彦）率いる王朝〕

天下は一つ、家は一つ〔神武東征）火火出見の孫・磐余彦、神日本磐余彦火火出見天皇〕

大和朝廷の成立〔大和朝廷＝和国が大倭国と共立した大和家に豊葦原中つ国・厳之国等を併合〕
〔物部氏＝軍事筆頭の重臣に抜擢された火明饒速日の児・可美真手が布都御魂剣を賜り、朝廷を守護〕
◇本書の王系譜　皇統万世一系→大乱後、倭国（高天、日前、和国）、邪馬台国、大日本家が並立
◇伊弉諾夫妻の実子・養子・人質、妃の養女・分身〔養女＝大宜都比売、埴山姫、罔象女、稚産霊ら〕
〔養子＝向津姫（日神の天照大御神）、豊受皇太神ら　人質＝少童三神、筒男三神ら、分身＝菊理媛〕
◇本書の王系譜〔海部氏系図、尾張氏系譜、「記紀」系譜の合成系図２〕

◇呉越の歴史／秦漢の統一王朝成立

前五〇〇年過ぎの春秋末期、呉越も支配してきた楚は、にわかに台頭した呉に敗北し、はるか西の都に都を移した。これ以降、中国では食うか食われるかの戦国時代が始まった。周公にあこがれた孔子が魯国で周政治を再現すべく試みたのも、悟りを開いた釈迦（仏陀、ゴータマ・シッダールタ）が鹿野苑や祇園精舎で弟子たちに説法してきたのも、この頃だ。

前四九四年、太伯につながる呉王夫差が越王句践率いる大軍を打ち破った。句践は兵五千と共に会稽山に立てこもったが、逃げる隙間もないほどに包囲された。進退窮まった句践が平身低頭して和睦を願い出ると、夫差は臣下の反対を押し切って和睦を許し、兵をさっさと引き上げた。

☆夫差は、荊蛮の千余家に担がれた太伯が自国を句呉と称して以来、二十余代目にあたる。

前四八九年、夫差は、斉では景公没後に大臣らが権勢を争っていると聞くや、北に出兵して艾陵（山東）で斉を叩いた。その後も斉に留まったままで、斉や魯の南方を攻略した。

前四八二年春にも北に軍を送り、黄地（河南）で諸侯らと会盟した。中国の覇者となって、周室を安泰せしめたいと望んだからだ。このとき、呉軍の精鋭はあらかたが夫差に随行して、残る老人や婦女子が太子と共に留守を預かっていた。

句践はその隙を突いて、水軍二千・訓練の行き届いた兵士四万・近親の武士六千・近衛兵千を総動員して呉の都に不意討ちをかけ、太子を殺害してしまった。

前四七八年、越はまたも呉に大勝してその都を包囲すること三年だった。

孔子の死から六年後の前四七三年、越軍はついに呉の都を落とした。句践は呉の国内を隅々まで平定すると、大軍と共に淮水を渡って斉・晋の諸侯らと徐州で会合し、ついで貢ぎ物を周室に献上した。周の元王は使者を遣わして句践に胙を賜い、覇者の称号・候伯を与えた。

この時期、越軍は長江や淮水の東を自由に行き来できたことで、諸侯らは越王句践を慶賀して覇

王として称えた。

故国を失った呉の遺民は、命からがら各地を放浪する者、江東から船出して海岸地帯をさ迷う者、東海上に乗り出す者、斉に隠れ潜む者、朝鮮や遼寧地方に脱出する者が跡を絶たなかった。

六代後の越王無疆も北に進軍して斉を攻め、ついで西の楚を伐って中原の諸侯と覇権を争った。前三三四年、彼は再び北上して斉を伐とうとしたが、翻意して楚の討伐に向かった。楚の威王はこれを迎え撃って越の所領をことごとく奪った。

解体の憂き目にあった越一門は、互いに小国を立てて相争い、ある者は王、ある者は君と称して長江南の海岸地域に割拠したが、いつしか楚に入朝して臣下に成り下がっていた。

真っ先に故国からはじき出された本家筋の越オロチ族一党は、安住の地を求めながらさ迷い、南の広東・安南の海岸地帯、北の朝鮮半島、東海上に散って行く他なかった。

その後、西の辺境にあった秦が中央集権化と工業化に力を注ぎ、最強国にのし上がってきた。残りの六国は秦の膨張を食い止めようと連衡や合従を繰り返したが、秦王は前二三〇年に韓、前二二三年に楚、前二二二年に燕、続いて前二二一年に斉を滅ぼし、天下統一を果たした。

秦王政は史上初めての統一国家を築くと、全国を三六郡に分かち、その郡をいくつもの県に細分して、郡には守なる行政長官と尉なる軍政長官、県に令なる官職を設けた上で、中央から郡や県に官僚を送って中央集権化を押し進めた。次に、自ら封禅して始皇帝と称した。

前二一〇年、その始皇帝が急死すると、反対派が一気に勢いづいた。楚国から立ち上がった項羽と劉邦が秦を倒し、先ずは項羽が覇者に立ったが、五年後の前二〇二年、人気のある劉邦（高祖）が垓下の一戦で項羽を破って漢を興し、ついで臣下に担がれる形で皇帝の座に就いた。

☆越王無疆から七代目の揺は、諸侯らが秦を平らげるのを手助けした。漢の高祖は揺に越王の称号を授けて、再び先祖の祭祀を継がしめた。

王系譜 http://www.hyogo-intercampus.ne.jp/gallery/yamatai/awebkeizu2.pdf

◇王朝の変遷

Ⅰ **那珂つ国**＝五帝期黄帝の一門（地の神）＋后土の国（黄泉国）　↓福岡平野に都す……前二十四世紀～

Ⅱ **那珂つ国＋天之国**〔太伯・呉王夫差の子孫、天（太陽）や日の神を崇拝〕、天地……前五世紀中頃
↓福岡平野の那珂川流域に都す

Ⅲ **厳之国王朝**＝夏后帝小康庶子・越王句践の子孫、越オロチ族↓福岡平野に都す　……前四世紀後半
一門を各地に策封↓吉野ヶ里（伊都国）、吉備（？）、出雲（佐太国）、摂津（小千族）、
奈良盆地（三輪オロチ、三輪氏）、北陸（越オロチ、越智氏）　那珂つ国を中つ国と改名させ、出雲に追放

Ⅳ **倭国王朝**＝天（厳）之国＋日高国（韓一門）、高天　↓唐津湾岸／福岡平野に都す　……前二二〇年頃

Ⅴ **豊葦原中つ国王朝**＝豊国（漢一門）＋葦原家（厳之国一門）＋中つ国　……前二世紀後半
↓福岡平野の早良／春日に都す。厳之国本家↓宗家の宗像家に祭り上げられ、玄海・宗像に閉居

Ⅵ **伊都国王朝**＝吉野ヶ里のオロチ族＋大倭家　……前一世紀中頃
↓吉野ヶ里から福岡平野の春日に乗り込み、糸島平野怡土に都す。豊葦原中つ国を出雲に追放

Ⅶ **倭奴国王朝**＝倭（高天）＋豊葦原中つ国、天地　↓怡土に天宮（天上の都）す　……一世紀前半
倭国大乱↓倭奴国王朝が三つに分裂　……一八〇年代中頃

副都オロチ勢・豊葦原瑞穂国　倭・日隈・大山祇神ら中つ国勢　日向・熊襲　豊葦原中つ国　出雲

邪馬台	畿内	倭・日隈・日向・熊襲	豊葦原中つ国・出雲
邪馬台	厳之国王朝（唐古）	高天　天之国王朝（高千穂宮）	出雲
天（厳）之国王朝（上之宮） 日本王朝（珠城宮）		日隈　日前、妻国、投馬、狗奴 熊襲　和王朝（高千穂宮）	素戔嗚↓豊葦原中つ国建て直しに失敗 大己貴（素戔嗚の児）↓葦原中つ国再建

Ⅷ **大和朝廷**　和国が大倭国と共立した大和家に豊葦原中つ国・厳之国等を併合　……三〇一年
物部氏＝軍事筆頭の重臣に抜擢された火明饒速日の児・可美真手が、布都御魂剣を賜り、朝廷を守護
神武（和王磐余彦）東征　……二八五～二九〇年代末

◇大和朝廷の成り立ち

「記紀」　天之国＋日高…周の伝統を継承し、天（日）を崇拝→倭国王朝→倭奴国王朝→和国→大和朝廷に発展

『史記』　周から荊蛮に逃れ、断髪文身した呉の太伯ら子孫→呉王夫差一族　天之国が日高と組み、倭国王朝樹立

→前五世紀、越に敗れて江東から渡来　→天之国　……天（厳）之国……　倭国王朝

『史記』　会稽に移封された夏后帝小康庶子→越王句践の末裔　（高天）

→前四世紀、楚に敗れて江南から渡来→オロチ厳之国王朝　→倭奴国王朝

→その後、水穂の厳之国（火、水）、厳之国宗家の宗像家　→熊襲の和国

『史記』　晋分家の韓（姫氏）一族　→秦に追われて朝鮮半島から渡来　→日高国　……　→大和朝廷

「倭人伝」　オロチ厳之国末裔…鯨面文身、断髪、鬼道など夏后帝小康・越王句践の伝統を継承し、蛇神を崇拝

→豊葦原中つ国王朝、伊都国王朝、邪馬台国〔瑞穂の厳之国王朝→天（厳）之国王朝→日本王朝〕に発展

前二三世紀？　前五世紀前半　前四世紀後半　前三世紀後半

那珂つ国／天之国→　オロチ厳之国王朝→内乱→倭国王朝（高天、天之国が日高と組み、王朝樹立）

前二世紀後半　前一世紀中頃　一世紀前半

→豊葦原中つ国王朝→伊都国王朝　→内乱→倭奴国王朝（天地、倭国が豊葦原中つ国と組み、王朝再興）

（吉野ヶ里の厳分家）

一八〇年代中頃、一九〇年前後～　二二〇年代前半　二八〇年代前半

倭国大乱　　天宮高千穂宮の高天　→　熊襲に天降った日隈・日前　→和国（いずれも古の倭奴国）

→王朝分裂　　皇太神（→天照大神）が樹立　日神（→倭の女王ヒミコ）　海幸彦（→火明饒速日）

幾内邪馬台国〔瑞穂の厳之国王朝→天（厳）之国王朝（＝倭国）→日本（やまと）王朝〕

出雲の葦原中つ国／奈良盆地の大日本（大倭）国

二八〇年代中頃～　二九〇年代末　三〇一年

→和王磐余彦（神武）東征→和国が天下統一し、大和朝廷樹立（熊襲の倭奴国勢が大倭国と組み、王朝再興）

『旧唐書』「倭国日本伝」、「倭国は古の倭奴国なり。・・その王、姓は阿毎（あめ、天）氏なり」、

「日本国は倭国の別種なり」、「日本は旧小国、倭国の地を併せたり」